

税制調査会（第23回総会）終了後の記者会見議事録

日 時：令和5年5月15日（月）11時24分

場 所：財務省第3特別会議室

○中里会長

プレスの皆様は、既に会議を直接お聞きのことと思いますので、ごく簡潔に冒頭の発言をさせていただきたいと思います。

本日は、今後答申に関しての具体的な議論を行うに当たっての前段の議論を行い、委員の皆様の間において活発な意見交換がなされました。かなり充実したことをおっしゃっていただけたのではないかと思います。

また、事務局からはこれまでの当調査会における有識者ヒアリングの振り返りなどを、これもかなり詳しく、分かりやすく説明していただきました。

本日は、委員の皆様から大変貴重な御意見を頂戴いたしましたので、これを可能な限り答申に反映すべく、文案の執筆、ドラフト作成を、神野会長代理とも御相談しつつ、実務的に、事務局や何人かの先生方にもお力をお借りしながら進めていければと考えております。

次回は、今月下旬に非公開形式の「起草会合」として開催をしたいと考えているわけでございます。

以上でございます。

○記者

御説明ありがとうございました。

今回の答申は、会長にとって10年間の任期の集大成になると思うのですけれども、どういう答申にしたいのか、意気込みを教えてくださいませんか。

○中里会長

これは私の一存でどうという話では必ずしもないのですけれども、10年という、随分長い時間がたってしましまして、多くのメンバーの方はこの10年間御一緒させていただいて、非常に勉強になりました。

それをまとめて、先ほども申しましたとおり、社会経済の変化に対応して、税制でできること、できないことはあるとしても、社会経済の変化がある、そのことによって問題も生じている。もちろんそれが良い方向に出ている場合には、その良いことを伸ばし、問題が生じている場合には、それを解決するような方向で、税制改革・税制改正の方向性を少しでも打ち出せたらということです。

ただ、そうは言ってもできることはどうしても限定されてしまうのかもしれませんが、それでも気持ちは率直に、かつ真っすぐにいきたいと思っています。現実的に、しかし、かつ理想は追いつつと、そういうことを考えております。

○記者

御説明ありがとうございました。

今日の会合では、委員の方から、例えば「税の公正・中立・簡素という原則に加えて十分性についても十分留意してください」とか、「財政支出に対して構造的な税収不足をどう補うのかについて、今回の答申でも反映させてほしい」みたいな問題意識が提起されましたけれども、改めまして会長御自身のお考えとして、税の十分性について答申にどのように反映させていきたいのか、お考えがありましたらお願いします。

○中里会長

私個人でも、家庭でも、それから組織でも、国でも、みんな同じですけれども、悲しい現実ではありますが、お金がないとできることが限られてきてしまうという現実があるわけです。これを乗り越えるというのはそう簡単なことではない。また、お金がないとできることが限られてくるから、お金を何とかしなければいけないと思ったとしても、そこは、十分性の原則と唱えれば十分なお金が入ってくるというものではないのだらうと思うのです。現実には様々な制約がありますので、十分なお金を集めたいと思っても、必ずしもそうはいかないことも起こってくるわけです。

こういう非常に困った状態になったときにどうしたらいいかといったら、大上段の原則を、旗を掲げるだけではどうにもならない。現実を見据えて、できることをできる順番でやっていく、これしかないと思うのです。その意味で、次回から各論に入って、個別具体的な論点について考えていこうと。その結果としてどうなるかということは総合的な調整の話ですから、具体的な議論の前に何かを唱えると、魔法の杖のようなことがあって、物事が解決するというわけではないところが、お金をめぐる問題の難しさなのでしょうね。

そういうふうに言うとなんて暗いみたいですが、そういうことではなくて、国民の皆様が生活がかかっていることですから、一生懸命、皆さんもそうだと思いますが、全員、それを何とかしたいと考えている。何とかしたいというのは、ただ集めるとかそういうことではなくて、どうしたら大きな問題、深刻な問題が起こらずに済むかということを考えていく。その点で、この国の意思決定というのは、賛成・反対、様々な御意見はあるでしょうけれども、私は非常に健全に動いているのではないかと考えております。

あまりお答えになりませんが、法律家ですから現実的なのです。だから、理念を唱えて問題が解決するとは必ずしも思っていない。だから、個別的なことを一生懸命やろうと。

○記者

先ほどの質問にも絡んでくるのですけれども、委員の先生の中からは、いわゆる20年前のものと比較しても、租税の十分性などまだ問題が残ったままになっていて、進展していない理由みたいなところにも言及するべきだというような御意見があったと思うのですが、実際、何が進展しない理由だとお考えかというのをお聞かせ願えます

か。

○中里会長

何か税制について議論をします、こうすれば全ての問題が解決しますという、そういう時間よ止まれというようなことは恐らくないのだろうと。常に問題が生じ、それを追いかけて問題を解決していく。さらに問題が生じ、それについて解決をしていくという、いちごっここと言うのですか。それが現実ですし、それをだから駄目だと言うのではなくて、それこそが政策だと私は思っています。

一挙に全ての問題が一発で解決して、今後永遠にそれで安泰だというようなことは決してないわけです。私たちの日々の生活も、今日元気で一生懸命やったらこれでもういいのだということにはならないので、常に何が起こるか分からない。起きたときにどう対応していくかという、日々のその都度その都度の意思決定の積み重ねとして、その結果として何かができるのではないかと思うわけです。

20年前に答申があり、その後もいろいろありましたけれども、社会経済の変化がこの20年間ものすごく急速に進展しました。それに対してその都度その都度一生懸命追いかけて、それに対する対応を図っていこうという努力は、この10年間、地道なことになりますけれども続けてきたのではないかと。私だけではなくて、委員の皆様も、事務局の皆様も、それからプレスの皆様もそうだと思いますが、それは続けてきたのではないかと思います。

日々のいろいろその都度その都度起こる問題に対して、その都度その都度いろいろな意見が出てきて、賛成・反対があって、議論があって、激論もある。その中でだんだん一つの方向にまとまっていく。さらにまた同じようなことが繰り返される。それが健全に、円滑にというか、激論もありながら健全に繰り返されていくことこそが民主主義だと思っていますので、私はそのプロセスに信頼を置いていますし、賛成・反対はもちろんあると思いますが、日本はそれがかなりうまくいっているのではないかなと思っています。だから、そのための努力を今後も続けていく、これに尽きるのではないのでしょうか。

○記者

そういう意味では、これまで努力を続けてきたというのを私も見てきたところではあるのですが、一方で、その結果、足元の問題の対処だけではワニの口は開く一方であったというのもこの10年、20年の姿なのかなとも思います。この辺りを改善していかないと若い世代にとっては不安感を払拭できないのだと思うのですが、この辺りはいかがでしょうか。

○中里会長

確かに私の世代と皆様の世代では受け止め方の深刻さが違ってくるのだろうと思うのです。ただ、政策というのは個別の意思決定の積み重ねでしかないと言うと何かあれですが、それが非常に重要だと思っています。その結果として、将来どんな方向にな

っていくかということに関しては、若い方にも御意見を頂戴し、年配の人間は年配の人間で御意見をお聞きするという事の中で、アドホックに問題が解決されていくということなのです。

ワニの口を閉じること自体が目的ではありませんから、国民があまり困らない、生きていけばいろいろなことがあるのですが、悲惨な状態になるような方がいらっしやらないような国家の運営がなされていくことが重要でございまして、きれいな理論を唱えるとか、万能の方策を提案するとか、そういうことにも意味はあるのかもしれませんが、それだけではなく、重要なのはあくまでも現実だと。現実の生活が回るように泥臭い努力をしていくということしか、人の生きていくことというのはそれしかないのではないかと考えているのです。

浮世離れしたことも重要なのでしょうけれども、そういう努力を積み重ねていける国があるということは、我々はラッキーだとむしろ思っております。

○記者

これから各論に入っていくということでしたが、次回の会合は非公開ということですが、議題としては何を考えているのですか。

○中里会長

委員の皆様と打合せをした上でですけれども、いろいろな項目を順番に見ていくということです。どういう順番でやるかについて、今、決まっているというわけでは必ずしもないということです。

けれども、総論的なことがあって、各論的なことがあって、まとめがあるという、そういうことはあるのですけれども、どういう順番でというのは、何回やるかにもよりますし、あるところでものすごく意見が飛び交うということもありますから、様子を見ながらということです。

○記者

任期が7月までだと思うので、そこまでに答申をまとめる方向で今後各論を何回か分からないけれども議論していくという理解でいいですか。

○中里会長

任期がございまして、任期が切れるまでに何とか頑張るといことなのだと思います。

○記者

あと一点、今回働き方に対しての中立というところが諮問でもあったと思うのですが、確かに社会経済状況は年功序列とかそういうものも変わってきている一方で、まだ残っている部分もある中で、この7月までに向けての答申の中で、現状も踏まえた上でどこまで具体化に向けて提言を出していくべきなのか、それとも出せると考えているのか、そこの辺り、会長のお考えを伺えますでしょうか。

○中里会長

ここしばらくずっとやってきたのは現状把握です。世の中がどうなっているのだろう、どう変化して、何が起きているのだろうということを、いろいろな方から御意見を伺いして、きれいに整理してみる。その中で、すごく良いこともありますし、困った問題も起きていますから、良いことはさらに伸ばして、困っている問題についてはどうやったら解決できるだろうということを考えていく。ただし、税制でできることにはおのずと限界があるわけです。だから、できる範囲で、税制でできることをやっ
ていこうと。

それから、税制で必ずしもできないことについては、他の様々な政策手段、いろいろなところで議論されていると思いますが、そういうところに意見を言うことが必要な場合も出てくるかもしれません。

○記者

中里会長は先ほどから社会経済の変化に対応していく、良い面も悪い面も、良い方向は伸ばすし、悪い方向には対処するというお考えがあると思うのですが、具体的に今回、デジタル化とかいろいろ変化があったと思うのですが、特に会長がポイントとして、どういう変化があって、それによってどういう弊害に対処していきたいのか、その辺りをもう少し詳しく御解説をお願いいたします。

○中里会長

問題の把握について、様々な識者の方にいらしていただいて、それぞれ思いの丈を述べていただいたわけです。それについての受け止め方は恐らく委員の方でそれぞれ少し違うのかもしれませんが、これは重要だと思いが委員の方々はそれぞれ少しずつ違うのかもしれませんが、その辺も、私がどう思うかということではなくて、私はタイムキーパーのようなものですから、この先生はこう思っていて、この先生はこう思っていて、さてどういうふうにこれを整理していこうかということになるのではないかと思っています。

税調で私が何か掛け声をかけるとどうにかなるといふ、そういう意思決定の仕方というのは必ずしもうまく機能しないかもしれず、それよりも、どう言ったらいいのか、控え目と言うのか、腰抜けと言うのか、よく分かりませんが、具体的な泥臭い努力が全てだと思ふのです。それをおろそかにして、美しいキャッチフレーズとか、こうすればという理念的なものにだけすがってしまうというのはどうなのかなと。それが私の考えですかね。

○記者

先ほどの質問と十分性のところでかぶると思うのですが、中期答申を7月までにまとめると思うのですが、まず確認なのだと思いますが、特にどの税とか個別に限った話ではなくて、税制全体として十分性というのが大事なのではないかというお話があったという理解でよろしかったでしょうか。

○中里会長

その委員は、今日は、充分性については総論的にそうおっしゃったのでしょうか。

税制というのは、様々な税の組合せです。この税だけがどうという話ではありません。ただ、それぞれの税ごとに、ここは変えたほうがいいのかとかいう問題は当然あると思うのですけれども、その中で全体としてある種の方向性が出てくる、社会経済の変化に応じて全体の調整をどう図っていくかということを考えているということでしょうか。

○記者

これが租税原則として入るとしたら、日本の財政、税制を含めて、ただプライマリーバランスに向けてはいいとか、そういうのは思いつくのですけれども、実際に言葉として入るとしたら、日本の財政、税制にどのような影響が出てくると中里会長はお考えか、そこもお伺いできますでしょうか。

○中里会長

様々な専門家の方が税調のメンバーとして加わっていらっしゃいます。それぞれの専門のお立場からそれぞれのことをおっしゃいます。それについて、記者の方それぞれのお考えによってどこを強調して報道するかというのは当然あると思うのですけれども、報道なされる。その中で、様々な反応が国民の皆様から返ってくる。それを見ながらさらに我々も考えるということの繰り返しではないかと思うのです。

私はこう考えたからこうだ、てこでも動かぬと、そんな力強い人間ではありませんし、そういうことでは多分ない。いろいろな御意見をきちんとお聞きして、できる範囲でできることをできる順番で考えていく、それ以外に問題の解決方法はないのではないかと考えてきているわけです。間違っているかもしれませんが、一応今はそう考えております。

[終了]